

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	当事者目線で「在宅医療後方支援」を考えると…
演者名	福永 美幸 下寺 直子
所属	ろっこう医療生活協同組合

目的：「在宅医療の体制構築に係る指針」によると 60%以上の国民が終末期は「自宅で療養したい」と回答した。また、要介護状態になっても、自宅や子供・親族の家で介護を希望する人が 40%を超えた。一方で 60%以上の国民が最後まで自宅での療養は困難と考えている、という。

①介護してくれる家族に負担がかかる ②症状が急変したときの不安がある ということ
 が大きな理由である。つまり国民の多くが在宅療養を希望しているが、得体の知れない不安
 があることで実現化できていないのではないか、と思われる。

難診療所病棟 (12 床) での入院内容と分析し、その取り組みと効果を報告する。

実践内容：難診療所 入院患者入院目的 (2014 年 4 月～9 月)

①レスパイト ②治療 ③トランジット ④検査 ⑤看取り ⑥リハビリテーション

すべての項目において多職種 (難診療所病棟チーム、在宅支援チーム合同) での支援を行
 っている。本人・家族を交えたアセスメント、カンファレンスを行い、生活の再構築を図っ
 ている。

実践効果：

退院後の在宅復帰率

①レスパイト 97% ②治療 80% ③トランジット 65% ④検査 100% ⑤リハビリ
 テーション 100%

考察：全ての項目において退院後の療養場所は「自宅」が高値を占めている。

上記にあげたように入院の目的は様々であるが、共通して言えるのは介護者支援に重きを置
 いていることである。在宅療養に介護者である家族の力は大きな要素になる。いわゆる「在
 宅医療後方支援」とは意味合いが少し違ってくる。あくまでも当事者目線で、療養生活を支
 える支援である。そう考えると介護者後方支援でもあると言えるのではないだろうか。患者
 である本人・介護者である家族の両方を多職種で支えていくことが後方支援＝「在宅療養後
 方支援」だと思われる。